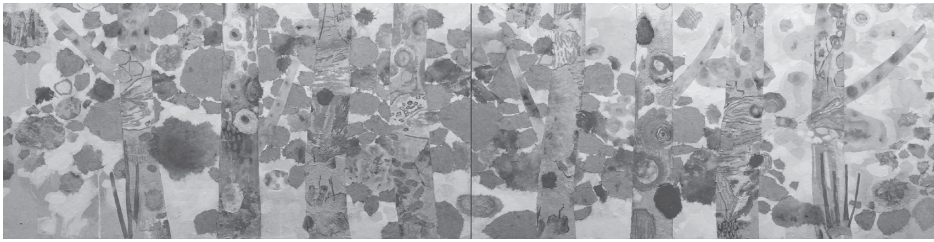


「鬼面づくり」に学ぶ

県教育庁義務教育課生徒指導推進室長

平 田 善 久



「先生にそっくりじゃないですか！」見る人、見る人が皆笑っていく。

昨年度、前任中学校でのこと。中学校区のPTA役員の方や地域の方から、小学校の校長先生と二人で、本格的な鬼面づくりに挑戦してみないか、とのお誘いを受けた。鬼面に装束で舞う祭があるほどの地域であり、その道のお師匠さんの講座にも参加できるとのことだ。当の私は、小学校時代の工作で酷い作品の数々を生み出してきた者として、なかなか承諾することはできなかった。しかし、……すでに賽は投げられていた。

講座初日。お師匠さんの自宅でゴザを敷き、木製台の上で粘土をこねる。鼻、目、眉などの輪郭を整えていく。これが実際に被ることのできる大きさの鬼面の型となる。約六時間の作業がやっと終わったと思ったその時だ、「じゃあ、宿題の説明するわ」——「ん、宿題?」。次回までに、和紙を手で割いて短冊とし、その短冊同士を三分の二ずつ重ねながら、粘土型に沿って四周糊付けせよとのこと。作業のゴールははるか彼方、という私の不安がよほど表情に出ていたのだろう。「先生、明後日の夕方にも、うまくいっているかどうか見に行つてあげようか?」と保存会の方の有り難いお言葉。ここでは即答、「お願いします」。

その後、和紙を乾かして粘土の型を抜くとお面らしくなり、やがて二本の角、四本の牙、赤、黒、黒金での色付け、シユロを束ねた髪……。三か月後の完成時、私は満面の笑みで鬼面を抱え、受講者の全員写真に収まることと相成った。不思議なもので、最後になるにつれ、講座が終わるのを寂しく思うようにさえなり、素晴らしい「場」を与えてもらったことに感謝した。

本気でチャレンジすれば、本物の仲間や連携ができる。何かを成し遂げれば、自己存在感が生まれる。これは、『生徒指導提要』（平成二十二年、文部科学省）にもあるとおり、生徒指導の原理そのものだ。そのためにも「場」の設定とその工夫・充実が必要なのだ、と改めて身をもって感じた。

スマートフォン等の適切な利用を考える「OKAYAMAスマホサミット二〇一六」が、募集を大きく上回る、中・高校三十一校の参加で始まっている。第二弾の今回は、子どもたちの主体性を大切にするという根本は変えず、サミットの議論を各校の取組につなげることに重点を置いている。各校二人ずつの代表生徒は大変頼もしく、サポート役の各校の先生方、各教育委員会、地元新聞社、大学関係者の緊密な連携のもと、「場」を充実させ、代表をはじめ、各校の多くの生徒の主体性を育むものにつながればと願っている。

いよいよ弥生。これまで先生方が八面六臂の働きで、授業、学級活動、学校行事、部活動など、様々な「場」で教え導かれた子どもたちの巣立ちや進級を見守る、祈りの時期となる。これまでと同様に、自己存在感や充実感をもたらす取組を最後まで御工夫いただき、子どもたちが喜色満面の年度末を迎えられれば本当に有り難いと思う。

さて、件の鬼面だが、今もあの場所から生徒たちの活躍を見守ってくれているにちがいない。